

「ソーシャルワーカーデー2016in やまぐち」を開催しました。

平成28年7月18日（祝）、徳山大学（周南市）にて『ソーシャルワーカーデーin やまぐち』が開催されました。

「ソーシャルワーカーデー」とは、さまざまな職場で働くソーシャルワーカーの話を聞いたり、ソーシャルワーカーの仕事や取り組んでいることを紹介する日です。

山口県では昨年度に引き続き、今年度も、山口県社会福祉士会、山口県精神保健福祉士協会、山口県医療ソーシャルワーカー協会の3団体による共催で「ソーシャルワークの楽しさ・こわさ・醍醐味」をテーマに、これからソーシャルワーカーを目指そうという方（学生、社会人など）、ソーシャルワークに興味のある方、県内の様々な分野で活躍するソーシャルワーカーが集い、日頃の活動報告を行うとともに、一層の連携を深め、その存在と情報を発信することを目的として開催されました。

参加者は、様々な分野のソーシャルワーカーを中心に、学生や医療、福祉関係のその他の職種、弁護士等、117名の参加がありました。

はじめに、山口県社会福祉士会、山口県精神保健福祉士協会、山口県医療ソーシャルワーカー協会の3団体の会長からの挨拶があり、その後、基調講演、シンポジウムが行われました。



（開会式の様子）

✿ 基調講演



（講演者：久田則夫氏）

基調講演として、「ソーシャルワークの楽しさ・こわさ・醍醐味」と題して、日本女子大学の教授 久田則夫氏にご講演をいただきました。

久田氏は、大学卒業後、施設で支援職員を経験され、その後イギリスの大学で3年半留学をされておられ、その経歴の中で先生が誇りとされている基本的な考え方は、社会福祉の世界で働いたその経験に無駄なことはひとつもないということだそうです。

また、今ある分析力や人前で話すといったスキルをどこで学んだかと問われれば、社会福祉の現場であると答えておられるとのこと。

留学をされていたとき、イギリスのソーシャルワーカーは、プロ意識が高く、自分たちの実践を通して社会的評価を挙げ、職業ブランドを上げるという意識があり、その上福祉という業界で自分自身の仕事に誇りをもって働いており、先生も感銘を受けられたそうです。

ソーシャルワーカー自身、その仕事は「大変だ」と感じながらも、大変だからこそやりがいがある、だから必要とされてクライアントの前にいるのだと、「大変さ」を前向きにとらえていたそうです。

ソーシャルワークの世界で働く喜び、働き甲斐は、他者から与えられるものではなく、自分で行動を起こし、手に入れていくものであると先生は言われています。

一方で、福祉の世界で働く「こわさ」は、“マイナス体質”にどっぷりと浸かってしまっている職場であると言われています。

マイナス体質の中でも、最も怖いのは「閉鎖的体質」とのこと。外部社会から遮断され、組織の中でしか通用しない常識がといった職場独自の組織文化がはびこっている体質のことだそうです。

働く喜びを実感できるソーシャルワーカーとなるために、利用者本位のサービス実現に向けて、ぶれない不動の軸を持って、専門職としての能力・才能を高め、仕事をするうえで基礎となる価値観を不断の努力と行動で磨くことが大切だとおっしゃっていました。

また、すべてのスタッフは期待に応えながら働きたいと思っています。誰もが気持ちよく働ける職場環境を確立するために、ほめ上手・認め上手・感謝上手・ねぎらい上手の4上手を心がけ、注意上手な職業人になることの大切さを最後に言われました。マイナス感情は、口に出さなくても伝わりやすいのに対し、プラスの感情は伝えるという努力をしないと伝わらない。プラスの感情を普段からしっかり伝えられていると、注意する場面になったとしても相手から納得をしてもらえと言われました。



(基調講演の様子)

先生の言葉一つひとつが印象的で、あっという間に時間が過ぎ、まだまだ聴きたいという雰囲気会場はつまれていました。

先生の講演を拝聴しながら、自身の専門職としての在り方・考え方、また職場環境について振り返ることができ、今後の課題を見つけることができました。

❁ シンポジウム



(シンポジウムの様子)

シンポジウムでは徳山大学 福祉情報学部 人間コミュニケーション学科 教授の小林武生氏をコーディネーターに「ソーシャルワークのやりがい・魅力とは」をテーマに各3団体を代表して、それぞれの機関における業務・役割・ルーツなどについて職場を紹介していただき、現在の業務についてのそれぞれの有り方・思いなどを発表していただきました。

まずはじめに、山口県社会福祉士会から「独立型社会福祉事務所 有限会社酔風企画」の山本孝博氏から、わたしらしく生きるということを模索しながら扮装され、ジレンマを抱え、常に使命感を携えて前へ前へ進んでいることがうかがい知ることができる今後の計画や取り組み内容をきき、熱い思いを受け取ることができた。まさに自分自身が地域の中で不足している社会資源そのものなることへの行動がソーシャルワークそのものを輝かせていることのように感じました。



(シンポジスト：山本孝博氏)

続いて、山口県精神保健福祉士協会から「医療法人社団共愛会 徳山静養院」の高井宏子氏が精神保健福祉士の立場から、現在行っている地域移行推進室での支援経過での思い、クライアントのできなかったことができるようになったこと（自立支援）が自分の喜びであり、一つ一つの出来事が積み重なっていき、喜びへと変わることが醍醐味であるとともに「あきらめない」姿勢を大切にされていることを伝えていただきました。



（シンポジスト：高井宏子氏）



（シンポジスト：吉田侑平氏）

最後に、山口県医療ソーシャルワーカー協会から「独立行政法人 地域医療機能推進機構 徳山中央病院」の吉田侑平氏から働く機関の特性及び業務内容の説明があり、その中での自分の役割とそのルーツを振り返って今感じることにについて夜回り先生を意識し、どの職場経験もまわり道も意味があることを話していただきました。

発表後、コーディネーターの小林氏より「仕事をしていて喜びを感じる」との質問があり、山本氏は身元保証制度で存在していなかったことを新たな制度として実現できたとき利用者に還元できたと思えるときを、高井氏は人としての成長が支援者に見えたときを、吉田氏は自分のアイデンティティが院内で認められたときを話されました。

また、会場フロアーから、「怖さをきかせてほしい」と質疑があり、山本氏は怖さを怖さと思えなくなっていること、高井氏は関わり過ぎてしまうこと、吉田氏は病院では治療が終わったわけではなく、転院をされるその命に係わる情報を取り扱うことに怖さを感じさせるとのことでした。



コーディネーター
小林武生氏



また、自分たちの仕事のPRとして、山本氏は介護保険のネットワークの拡がりや司法書士・スクールソーシャルワークの連携など制度の隙間をうめる作業であり行政に働きかけることがこれからの使命であること、高井氏は支援者として支援する私たちは実は支援されていることに気づく喜びを分かち合えることやその他小さな喜びが沢山ある仕事であること、



吉田氏は自分たちのもつ福祉のエッセンスをとけこませながら人の人生に関われる仕事であるからこそやりがいがあることを伝えていただきました。

シンポジウムのまとめとしてコメンテーターの久田氏から、自分の可能性を信じ切り開いていくことと助走距離を長くすれば高く飛べることなど、地域で当たり前暮らすことができることを支援する最前線のノーマライゼーションであるという意味付けなどからフロアーとシンポジストがソーシャルワークについての意識をより高めることができた内容で幕をとじました。



コメンテーター
久田則夫氏

参加者の皆様からは、

- 今後の実践現場で活かせる内容であった。
- 大切なことに改めて気づくことができた。
- 心に響く内容であり、モチベーションが上がった。
- 原点に立ち返ることができた。

等、参加者の心を打つ内容であったことの回答が多く実り多い研修であったと感じています。

最後に、来年度ソーシャルワーカーデー開催地を代表して、山口県社会福祉士会萩市・長門市・阿武町ブロックのブロック長 中村幸一郎氏より閉会の挨拶があり、幕を閉じました。

今後も、ソーシャルワーカーデーのイベントを実施する予定です。機会がありましたら、皆様もご参加ください。

ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。

